

● 高澤良一 第七句集 宿好

● 一月―三月

お元日目許賢き鳩が来て
浅黄空おらが一茶の國の春
泥繩の一年が又生まれり
歳旦吟踏まえ所が大事なり
申し出るごとくに年の来給へり
こざつぱりして定年を迎ふ年
待望の景氣上向く年ならず
年酒して赤熊しゃぐまのごとく目がすわり
年男さすれば龍となり舞はん
抜き放つだんびらのごと年立てり
千里眼年神霞む野に立てり
リラツクスリラツクスして年迎ふ
言葉にも矯め方があり姫始め
鏡餅ことし奮発したりけり
掌が飛んで来るなり歌留多取
食積のまづ柔らかきものつまむ
年賀状ああこの人のこの癖字
初雀トコトコトツと石畳
壁に杖立てかけてあり初句会
福寿草今年定年自適の日々が待たれけり
六十年寝起きの一間初明り
死んでゆく身故の花鳥風月とよ
鏡餅不景氣の年重ねけり
筆始め要らぬところに力入れ
連れ立ちて仲見世をゆく春シヨール
身綺麗になりて辰年迎へけり
人波に旨く乗りけり初詣
赤ん坊の笑ひ初めなり福は内

屑籠に二日の日差し移りけり
裘裘見て振り返る
泉岳寺粉雪じゃんじゃん降りにけり
梅林は蒼ばかりで素っ気なし
雲にも雪にもならず唯の雨
予防注射したもののさあどうなんだ
寒ンの採尿咄嗟に出たりするもんか
着膨れて唯唯診察待つばかり
手袋をしてゐてうっかり落し物
切通し朝比奈 熊野神社磐しぼる水凍りつき
切通し落葉朽葉を踏み付けに
三極と見しがまさしくさうであり
さて何本ここから見ゆる崖つらら
もう一本引きずられ落つ崖つらら
梅林に鋏と鋸のこの剪定音
梅林の剪定済めば鴉が来
柿の蒂カアの一ト声凍みるなり
山鳩のごとく身を揉み寒ン払ふ
とつつきの梅の一輪嗅ぎゐたり
山歩き煤け木五倍子の芽に出会ふ
ざうざうと山の枯蔓滝なせり
鼻莫迦になるまで寒ンの通勤路
寒曉の国道をゆく貌つんつる
街路樹の枯木のパントマイムかな
大寒の底光りせる檜青葉
探梅の探しあてたる一二輪
極寒をこくんと一つ醤油の音
火の用心命用心寒最中
出勤の一人一人の余寒顔
瘦せ杭の彼方に一つ浮寝鳥

ポケットの握り拳も氷点下
塗箸がはたまた牡蠣が滑るのか
着膨れてじつと一日家の中
寒晴れにああと鴉も諾ひて
寒晴れの飛行物体ジュラルミン
心臓が縮まるけさは寒いねえ
風邪引いて床に打ち臥す図は平目
風邪の身の海月さながら廁まで
僧正のそらそらそらと豆撒く手
八幡宮宮司を上座午まつり
その中に新あらの鳥居も一の午
午まつり氏子ら煎餅座布団に
三寒の黒竹粹な一商家
寒晴れの鼻梁に海の風少し
紅梅のいろの飛びたる訪問着
雷門潜り四温の中国語
貴女まあお変わり無くてと針納め
つつみ紙楚々と開きて針納め
針納む美風普く傳はりて
この道で生活たつき立て来し針供養
まなうらにミシン踏む母針納め
紅絹もみいろに浅草の空針納め
鼻の上にちよこんと眼鏡針納め
青空に木の葉一枚吸はれゆく
鳩の眼のくりくりけふは春立つ日
年の豆日差しに紛れてしまひけり
大銀杏隆と曙豆を撒く
鬼やらひ鬚も凜々しく武蔵丸
豆撒きの淡谷のり子のこゑの張り
杭打ちて二月の蚯蚓驚かす

玻璃越しに雀を覗く寒がり屋
立春のリビング・ルームに鳥影さす
立春の日に当たりたく庭に出づ
寒晴れの隣家に来意告げゐたる
乾燥芋焙り上手よ婆ちゃん子
さんざんな日の食卓にほうれん草
冬鶯吸ひ付くやうに梅が枝に
尾の長きこの鳥去れば寒暮の木
鈴懸の意地といふ他なき枯れ瘤
ふきのたう月例会に持ち込めり
浅春の櫂に鶺鴒のむかう向き
干柿のこれで五つ目癩な種
立春の肉屋の前を通りけり
酷寒に打たれて覺めぬ梅の性しやう
梅見ての余生などとはとんでもない
旧軍港浮寝の鳥もなかりけり
人を見て寄り来る鴨の日和貌
定年がもう目の前に水温む
鉢小物持出し春の土いじり
水温む池に棒切れ浮いてをり
水温む水面に顔を持ってゆく
春めくと家路半ばにして思ふ
砂場の子遠く見守る四温の目
すってんと転んで掴む春の土
暖くなりて砂場の砂いじり
豆撒きの赤鬼さんと青鬼くん
一通り梅林を見て引き返す
寒がりには内弁慶に似て家居
のんのんと海上に出る春の雲
三さん一びんの弥太郎戀猫徘徊す

花桃は田舎娘の器量佳し
血色よき兒童が通る春日中
鳥雲に年金のこと生活たつきのこと
蝌蚪に見る定年といふピリオッド
あほむくもうつむくもよし山椿
痛み分けてふ語がふつと寒椿
苗札もびしよびしよに水遣りにけり
粗樫の葉に吹きつゝのる涅槃西風
日の差せば浮き上がり来る花三極
土佐水木枝は木臘の光ゲ持ちて
枯れてをりウツボカズラの壺半分
やみくもに連翹の芽をつけたがる
チューリップの芽立ち囀り初むやうに
枝先に合歡の枯れ莢ひいふうみい
うぐひす餅それでと話促せり
棒切れをずるりと滑り蝌蚪の紐
五分咲きの梅と聞きしが嘘ばかり
つくねんと柿の木いっぽん枯月夜
青空のまま昏れ柿の蒂月夜
年金の本など読んで目借り時
仕事かたし来て春菊のごまよごし
山茱萸の弾けてぽつと夕日中
もめごと一段落し桃の花
梅汚れ番の目白来ずなりぬ
花つけてとつても寒き日の山茱萸
土いじりするりと抜けてはこべの根
世話なしの都忘れの株殖やす
月あるも寒さしぶとき戻り道
幼子に堇のいろを言はせをり
クロツカスぐらと地表を吹ける風

辛夷吹き天地の間を抜ける風
花ミモザ黄み搔き立てて咲けるなり
船で来て安房の花菜に染まらんと
茅ヶ崎 氷室椿庭園
洋椿和椿椿園巡る
鳥ごゑのときに絶えたり椿園
早咲きの椿椿と口揃え
毛糸帽椿の花粉付けて来し
日月のあかあか椿白椿
喋々と鳥語椿の林なす
初蝶のいとたをやかに舞ひ出しぬ
靴先で朴の落葉を返すべく
春めくと探りを入るゝごとき日差し
快活に道問ふ青年白木蓮
春櫂ゆとりをもつて眺めけり
杏咲く情に溺るるごとくなり
杏は桃に一足先にと云うて散る
連翹も微笑年金にも課税

●四月―六月

接骨木の芽の付き方は唯杜撰
足出して生けるしるしをだんご虫
はげちよろの蜆の尻のすまし汁
土筆土筆ガウディーの塔ここに建つ
馬刀突きといふ捕物に似たるもの
やどかりの新しがり屋宿替えぬ
増上寺総門前の植木市
つかぬこと伺ひますがと連翹越し
初桜風来れば又そはそはと
つくづくとさくら花満ち日に重る
腕によりかけてこれより糸桜
夕桜すつと色調落しけり
夜桜もぼんぼりの灯もほたほたと
夜桜の雪洞尽きるところまで
日永の亀首伸ばす方何ぞある
こんなにも亀があるとは日永の池
泳ぎ来る亀を亀見て日の永し
帰るさも日永の亀の甲羅干し
山道のここにどっこい蝮蛇草
年々にたちつぼすみれ淡きかな
岨道に六方踏むややぶれ傘
芽吹くなら櫛パッとパッと
階に池に落花の選り好み
やぶれ傘傘さしきればつまらなき
やぶれ傘臺が立つとはこんなもの
土筆ぽかんとしてゐるうちに命日過ぐ
風はたと絶えし桜の日に重る
踏青の三時となれば風冷え来
芽吹く山見てゐて画法朦朧体

ネクタイをして花見とは上野山

この人のかうゆう句が好きさくら時
相模野の青きを踏み来て手ぶらかな
亀鳴くを聴くとておかしからぬ齡

駒返る草定年を前にして

合いの手に潮騒浜の三味線草

歩く会雨天決行チューリップ

出来れば近場妻との花見何處にせん

漫然と櫻は芽吹き初めにけり

御忌御忌と鳥啼けるなり増上寺

一滴の雨にも遇はず初ざくら

福島は桃桃の花霞

東北行

落花ひとひら二本松少年隊

角館郵便局の糸桜

北国の餅肌いろのさくら咲く

花辛夷飛び込んでくる田沢湖線

鳥雲「解体新書」挿絵画家小野田直武に直武描きし人體圖

ほくり咲き秋田支藩の武家屋敷

まんずまんず寄ってたんせとタラの芽売る

もくもくと花冷えどきの樺細工

ひゅうと手が伸びて編み込む通草蔓

落雁売茶っこさのんでいけといふ

桧木内川高堤いま花堤

花堤万の蕙を敷き詰めて

いぶりがっこキザミがっこに花の昼

川沿ひにセスナ機飛んで花見時

水芭蕉田沢湖水に萎ゆ花横たへて

山毛櫨描くコンテさくさく雪間どき

雪割れの雪を山毛櫨の根受け止めて

人間にくびるゝところ雪間の温泉ゆ

山蛙聞き駘蕩として長湯
石割石割桜のえらい桜を一目見ん
朝の気の漲る石割桜是
枝張りも根張りも石割大桜
あれまあと石ぶち割って咲く桜
ものの芽も盛岡弁ももそもそと
呆けをる土筆と待てる釜石線
陽炎を搔き分け搔き分け釜石線
膝を詰め遅日の遠野物語
土筆つぐす生えコンセイサマの石ほとり
泥鰌どんじよ捕りザシキワラシも加はりて
青蛙あおびつき遠野に雨をもたらせり
横柄な遠野鴉に畦青む
田起しの小田の畦草なまなまと
カッパ淵遅日の祠一つ置き
カッパ淵杉菜の青を流しけり
永日の河童に逢ひにカッパ淵
遠野の子手っこつないですかんぽ道
語り部の火箸叩いて締めくくる
曲り家の三和土伝ひて昼蛙
ひつつめに腹のぬくもる夕蛙
対岸割烹の花を着に枕流亭
さくら時堤ゆく人豆粒大
堤より花の散り込む遊び舟
落花踏み歩む堤よ北上よ
北上川ホテルの朝の水勢さくら満つ
花巡りホテル今日の泊りは武蔵坊
高館中尊寺の落花しづしづ静の舞
清衡が夢みし花の仏国土
繽紛と飛花の舞ふ方衣川

たそがれ毛越寺の光帯びつつあめんぼう
来てみれば雀隠れの衣川
衣川やいのやいのと代蛙
たんぽぽに村内放送よく通る
一夜荒れ濁りのとれぬ代田水
毘沙門達谷窟天蝦夷えみしに睨み利かす寺
悪路王籠りし達谷窟おぼろ
悪路王此処に討たれぬ大馬陸
唇の分厚き日永の磨崖仏
達谷の岩屋へやぶれ傘の道
花は楚々岩は恢々巖美溪
溪底の甌穴に飛花あやまたず
発送須賀川の牡丹苗木は横浜まで
牡丹に寄す侍従長筆大御歌おおみうた
春先の牡丹の手入れもくもくと
牡丹守この須賀川の地味を云ふ
薬用としての牡丹の在来種
祖牡丹おや撰津の國より持ち込みて
すっぱりと芽二つ残し牡丹剪る
風嫌ふ牡丹の葉剪り大切と
牡丹は剪らねば剪ればよき花を
牡丹の手入れ総勢二十名
磊落な榊の落とせる春落葉
魁さきがけのさきがけ一花百花の気概もて
階きの壁を見上げて蟻の居り
蟻蟻と見遣るその先亦も蟻
大風に吹き曲げらるる蟻の道
山門の蟻に見限りつけ小屋
亀の子は首から泛かむこと覚え
水馬試し走りの朝の池

ホバリングする虻に貌突き出して

方向をくるりと転じ虻の尻

紫木蓮江ノ島周辺酣なりしがそれも散り

紫木蓮滝ノ口にも腰越にも

腰越状したためし地の諸葛菜

階きざはし攀ず足許を見て椿見て

岩畳蟹追いかけて追いかけて

抱一奥津宮の亀に鳴かれて島巡り

鳶のこゑ島の椿を真っ赤にす

島の著莪活けて茶店の富士見亭

追ひやれど膝にまたくる島の蠅

砂浜に足投げ出して日永人

春陰の大明竹たいみんちくに噎びゆく

蝸牛化シテ蛞蝓カッユトナラン今日カラハ

グラビア版カレンダーあり裸婦と薔薇

剪り取りてヨハネの首のごとき薔薇

一政の龍三郎の得手の薔薇

晩年を薔薇に腐心の老大家

一政の心頭の薔薇真くれなる

けふと踏む予感当りて薔薇崩る

この森の貴公子楠の若葉せり

ヒトゲノム解説せよと亀鳴けり

葉ざくらの葉末までゆきわたる風

絮たんぽぽ肺活量ジヨージ・グロス回顧展は人並み以下

ハイル・ヒトラー！鷺ペンで描く髭薄暑

日傘して次に浮き来る亀を待つ

甲羅干しなどして亀の子亀之助

萍に鎌倉の昼深きかな

蓮丸葉ついと流るる風起ちて

著莪に雨たうたう来たねとご住職

傘行き交ふ紫陽花のだらだら坂

旧西田幾多郎宅
哲学を此処に深めぬ雪の下

擬宝珠の茎をするりと雨滴馳せ

あぢさゐのぼろんと零す雨滴かな

柄の大きかうもり傘より梅雨霏

江ノ電はゴトゴトと来ぬ梅雨枕木

●七月―九月

ぷくぷくの素足むんずと赤子立つ

濡縁に落梅三つ四つ寄せてあり

アトリエを包む潮騒花ダチュラ

サーファアの臀部凜々しく南風吹く中

葎切の直談判が続きをり

ほうたるの自家発電の灯の明し

ほたるにも戀の鞘当てありぬべし

ぶらさがり咲きが得手なり花ダチュラ

河童忌の横須賀海軍カレー食ぶ

鱒上高地ぐらとその向き変へる翳涼し

すれ違ふ蹠の涼大正池

カルピスを喫し涼める上高地

夏川に手を突っ込んでつめたしと

驟雨来て朝の大正池壊す

上高地降られに寄ったやうなもの

偽八ヶ岳へ兜虫かぶと飛んだりまっしぐら

日雷雷電関の碑いしづみに

涼奏奏鳴館でオルゴール(オルゴール博物館)函シンフォニオン

白雨抜け泊りは星の白馬村

お花畑雨も疾走虻も疾走

ガレ場白馬岳 八方尾根あり奈落より現る高山蝶

真上より天つ日ハッポウウスユキソウ

溪寄りの脇道閉鎖チングルマ

二株のハクサンシャジンケルンに待す

草臥れて瓦礫に座せばベニヒカゲ

遠雷が一つ鳴りみて下山道

山小屋の窓辺に蠅の頓死せり

驟雨来空ゴンドラを送りけり

登ってさんざん下りてさんざん岳タ立

兎平駅にて夕立遣り過ぐす
珈琲を喫せりロツヂ「五千尺」
アマニユウとアマニユウの間雪溪見ゆ
風の道即ち松虫草の道
混むでもなくまばらでもなく吾亦紅
ガレ場にて嘎れしこゑの昼の虫
後ろより兀と迫れる登山靴
積まれたる石の放熱夏空に
ふらふらと頭の上にくる岳蜻蛉
おむすび喰ふ肱を廻りて山の蟻
足垂らし涼みあるなりケルンの端
ケルン経て風届くなり車百合
岳蜻蛉日差しの強さ知ってをり
太陽は真近しエチゴキジムシロ
時かけて風の第三ケルンまで
夏の露ころりと白馬岳快晴
オオバギボウシ白雲翳り易くして
露は凝りゐたりタテヤマウツボ草
白雲の雲影よぎるカラマツ草
雪割草風透き通るこの辺り
雪溪の風の抜け口おお涼し
チングルマ好みの風が吹いてをり
見晴らしは兎も角雪溪よぎるとせん
雪溪の舌の先なるチングルマ
マンモスの臼齒のやうな岩に蝶
トラノオのその先霧の粗く飛ぶ
アマニユウにピカッとザザッと降るわいな
エゾホソイ山雨傍若無人なり
やたら落ち田舎っぺえのはたた神
雨脚のみるみる太しオヤマソバ

ウメバチソウ我等向き合ひ昼餉とる
ハクサンフウロガレ場の風に煽られて
八方尾根下山がたがた蝶番
健脚なご婦人トリアシシヨウマの辺
ハクサンシャジンリフト減速して頂上
お花畑雲の空中散歩かな
登り来てモウセンゴケに顎出しぬ
シヨウマ等ちらちら兔平かな
トレッキングシューズの先の岩鏡
白馬山麓星夜天然冷房裡
驟雨来ぬ白馬の美田輝かせ
スキー場写真真木造リフトの世
夏白馬村細野諏訪社の露払ひ諏訪社の五兵衛杉
北安曇野月夜高吟小田蛙
武甲山どんと構えて夏休
紅花隠元咲けば秩父に盆が来る
札所寺大鉢に生ふ布袋草
堂縁に一つ載せあり蟬骸
かんかん照り雀翔つさへ億劫な
灸花七番寺へ喘ぎ坂
巡礼の秩父はかんかん照りの道
秩父事件蜂起の鐘を蟬抱き
流燈長瀬のライン下りとなりにけり
急湍にかかる流燈間合詰め
流燈の二つひつつき流れけり
流燈の脈打つごとく打過ぎぬ
闇より手伸び来て流燈すいと押す
流燈はおのが道筋照らしゆく
流燈のひかひか川面照らしゆく
瞬けば流燈もまた瞬ける

うつつすらと水明り流燈そこを過ぐ
佳き地名ありてふつと

山峡の門平風戸で降りて鮎を釣る

虫送り嶺に張りつく二集落

虫送り竹竿に鉦ぶるさげて

あきあかね先導つとむ虫送り

虫送り五色のノロセ持ち寄りて

盆がらを追ひやる掛け声山里に
*盆がらは農作物の病害虫のこと

山風に「ようづの虫も送るヨイ」

ゆく雲に「はやりの虫も送るヨイ」

盆がらにあらざる秋津里に殖え

虫送り撮りにケーブルテレビ局

村の衆手拭い首に虫送り

秩父神社やごころおもいかねのみこと
蛸聞き八意 思兼命

札所寺二番で降られ夏の雨

青栗にさしもの秩父の雨上がる

こんにやくの茎しげしげと見て秩父

早稲の香の沸きかへる中巡礼道

札所寺百日紅に汗退けり

団扇など置きてもてなす札所寺

団扇風いただき一番札所寺

青田風吹き込む三番札所寺

街道はこれから灼けむ露葎

百日紅どうれと山門潜りけり

大滝村桑が長じてしまひけり

風船かづら祖霊送りに済ませしよ

しようりようばった一巡りしてわが足許

花火見る旅も山下清めく

揚花火どんと武甲山の肩を突き

昇りつむ花火の青息吐息かな

両神山を指呼に頂上涼み台

湧く雲も胡麻の花いろ奥秩父
水団終戦日腹毎日あれから五十年
水団の戦後生まれを自認せり
水を張る手も逸りけり金魚鉢
曝書などせんとて一念発起の日
水を撒く母がもつともすすしさう
麦湯煮ることに精出す妻なりき
妻の夏吾が夏一つ屋根の下
年金の出る齡となり鳩麦茶
麦湯飲み暑さ負けせぬ夫婦なり
鳩麦を加ふ麦湯の香なりけり
栗の樹下髪を叩いて蟻落す
風鈴の広長舌を聞き遣るべし
職引きて麦湯の湯気のやうな日々
仕事人間止めて風鈴吊る家に
蝉の穴ホーチンミンも斯く潜み
虫瘤の意気壮んなり真炎天
定年だあ定年だあと蝉啼くも
捕れたかと云へば虫籠掲げ見す
花火音立て込む家に匂して
花火にも前座・真打ちありにけり
片陰ゆくハローワークの呼び出し日
海水着はちきれさうよ如来肌
蒲焼きなど母に奢ろうかとおもふ
鰻召せ長寿の因もとの鰻召せ
シンクロナイズドスイミング咲かす四肢の花
ダイビング黄膚台頭アジア勢
大井川葛は暴走して止まず
月端はなの蝉ごゑ何処か衰へし
朝顔の遅まき咲といふがぼと

芙蓉淡々同窓会の日が近む
秋草も黄勝ちの野草摘みとりぬ
霧の中霧に日当る一所
踊り手が町八尾の風の盆に戻りて風の盆
坂の町足のむくま風の盆
石垣の上の町並み風の盆
川の音おわら流しの遠ざかる
おわら見て二階に風の通る家
風の盆朝顔の葉に灯の洩れて
足そろと運びておわら流しかな
おわら流しふらりと出でて町流す
太棹の影が法被に風の盆
夕顔とおわら流しの宵迎ふ
町衆の趣向の法被風の盆
おわら流し橋で一息入れゆけり
くらがりに鈴虫を飼ふ風の盆
編笠も月を象かたどる風の盆
団扇風妻より貰ひ風の盆
風おさまる如く豊年踊果つ
紅引いておわら流しの出を待つ娘
夕顔に胡弓漂ひ初めにけり
おわら流し折り目正しき手の捌き
佳き風が出て来ておわら流しどき
素通しに川原の見ゆる盆の家
聞名もんみやうじ寺堂縁借りておわら節
一寸手を空に合はせて女の踊り
揃え脱ぐおわら流しの草履に名
今町のおわら流しの浴衣柄
黒羽二重法被衣桁に風の盆
八尾びと路地先に据ふ涼み台

一息に唄ひ切らねば風の盆
細き路地大きく使ひ総流し
おわら流しここで一服私も一服
おわら流しころと川原の石鳴れり
旅先の加賀の地酒に蓮の実
卯辰山前に白萩うねり初め
東尋坊美しやビールはの泡透けて
東尋坊岩間に昼の虫音澄み
切り刻むビュッフェベルナール・ビュッフェ展の描線卓と百合
描線の威嚇と攻撃巴里凍つる
冬景色殊にビュッフェの垂直線
青芭蕉鍋木清方爛らるる日の清方展
清方のほゞづきの絵のほゞづき鳴る
清方の八百屋お七の紅の涼
蛸をまどろみの中暮れて来し
かまつかの彩なかなかに鄙ぶ寺
秋口に降りては埃くさき雨
きゅつと鳴る紅茶の砂糖秋の昼
つきだしに水もしたたる新豆腐
竜淵に潜みとろんと紹興酒
包み込むやうに秋雨降り出しぬ
澄み澄みて水も心も方円に
しがらみの地縁人縁まんじゅさげ
雨のあと直ぐ日が射して雁来紅
肝張っていきいき鳴ける朝の虫
羽蟻墜つ奇妙な夜となりにけり
のうぜんの宙ぶらりんや糞暑し
昼月をあふぎ海月の波枕
庭石を二つ渡りし良夜なる
今日の月三溪園の松越しに

月祀る芒に添えてゑのころも
観月会琵琶の音締めを襖越し
颱風のたてこんでくるこの時分
颱風の道草食うて近畿道
颱風のアップパーカット喰らふ軒
内々の話にも触れ菊脛
翹ひろぐうすばかげろうガレの壺
雑俳と諧作っても作っても
ひっひつと聞こえて遠をちの秋の蝉
腹立つとみえて蠋螂斧振り上ぐ
安んずること木守に及ばざる
虻去るとはつかに石路の独り言
秋風にひとり歩きの嘘往けり
何處となく色づいて来ぬ瘤櫛
不細工は不細工なりにもみづれり
等類の右へならへに倦む秋夜
燈火親しめず雲脂より軽き句に
長き夜のどうでもよき句は読み飛ばす
そのかみの力士と云へば名寄岩
ほればれとするあんこ腹鏡里
東海の弓取り上手大岩山
あんこ形力士あづくるあんこ腹
かうなれば小細工効かぬ四つ角力
秋場所の力相撲となりにけり
突っ張ってはたいていなす技てが効いて
舞ノ海大きな相撲取りにけり
横綱の巨きな張り手飛んでくる
どうにでもなれと当るが勝角力
尻はたきここ一番の大相撲
解説は相撲巧者の舞ノ海

勝ち越しのすまふに花を添えにけり
負越しの土俵勤むも後二番
横綱を取って投げたる晴姿
投げられて口をへの字の武蔵丸
踏み込んでやうやく初日しよにちの出るすまふ
待ったなしうるさきすまふ取る同志
持ちまえのがむしやらが出て負相撲
立て込める黒星同志「はっけよい」
好調は躰に任せとる相撲
乾坤の当りに懸けぬ土佐ノ海
俳諧に我も自分の相撲とる

●十月―十二月

蝶せせる薬わなわなとまんじゅさげ

新米の穫れ高「んだな二十俵」

鳶の糞里芋の葉に垂れてける

まんじゅさげ生白の茎によきによきと

手折りみむかやつり草の彼のにほひ

稲雀上げ下げ崎の棚田かな

稲架組んで手刈りの頃の話かな

敬老日ころっと忘れをりにけり

虫のこゑじいんじいんと稲稔る

ランチタイムは秋のシシリア風ピザに

ピザの秋アイダホスペシャル平らげて

十団子に添えて十団子由来状

顔つくる外出の妻に昼の虫

妻と吾と旬の秋刀魚を二等分

昼からの芙蓉曇りとなりにつけり

洋梨のおいど優しきものの一つ

ちびっこの駆け足ぱたぱた運動会

老い進む三町内の運動会

物音のよく通る空烏瓜

懸案の一事果たしぬ衣被

女郎蜘蛛縦の糸張る手順見て

白芙蓉咲き加はりし庭の景

ときめきの色に出でたる実むらさき

閑日の昨日今日明日芙蓉の実

今年米うまかり今日に明日に処す

蠮螋は千人斬りの構えなり

青蠮螋生兵法の斧を振る

藁持って青蠮螋を指南せる

長き夜の寝惚先生文集読む

その辺の呼吸呑み込み松手入
隼人瓜弾けば陶の音したり
木犀のこまごま蕾むこと一途
もう一度見てから寝ねん後の月
静物画縞のオブリジェの烏瓜
街騒に木犀零れ初めにけり
いかつくて何處か優しき青くわりん
犬蓼にけふの散歩はここ迄と
雌日芝に降り癖つきぬ野辺のそら
かやつり草背高きは摘み取られけり
市庁舎のユリの木黄葉始まれり
ご町内木犀の香のつなぐ路
虫瘤ももみづる頃となりけり
紛れ込む蠅螂を外とに出し遣りぬ
蝶々ミヤコ蝶々逝くに浪花をんなの粹見たり
瀬祭忌発句にもある著作権
七五三辺り走れる櫂の根
女郎蜘蛛楯円函数論知るや
雨衝ひたごころいて啼き出す鴟の直心
もみづ北山れる高雄ホテルの絨緞も
しぐれ高山寺聞きちりめん山椒一トつまみ
樹上高山寺には明恵 樹下には女郎蜘蛛
真かみっ白に明恵の咲かす茸なり
百段の上かみから落葉搔始む
一頻り萩刈る音か高山寺
ぼこぼこと明恵が頭つむりくわりんの実
しぐれ避け北山杉の見ゆる簷
水引がすいと目に入る高山寺
お茶の実がしんしん冷ゆる高山寺
栄西の茶種育てし露の畑

しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ
柎尾のお茶の実に凝る雨雫

秋草を鳥羽絵の兔高掲げ

茶の青実曰く「阿留辺幾夜宇和」とは

茶が咲けば清貧一途の明恵見ゆ

川砂西明寺を敷きて時雨の通る庭

神護寺神護寺のここで一服紅葉茶屋

もみぢ葉は真言陀羅尼 義趣を秘む

神護寺の紅葉明りに一凡夫

日金閣寺が当り嘯りさうな梅擬

背負籠より十歩が程の落葉搔く

金欄の綾なす鯉と金閣と

万両の向うを通る水のこゑ

楓かえるでの穴惑めく走り根よ

赤松に秋の陽赤セキと鹿苑寺

露けさの金閣見んと一歩寄る

金閣の金を破りて錦鯉

青松に金閣の金ン飛ばしけり

露の金閣屋根は椹と申されき

金閣を呑まんばかりに鯉の口

秋気満つ金閣を出て銀閣へ

龍安寺龍安寺自問自答の鴟のゐて

真昼間の石庭あるく蟻を見ず

佗助の自足の花とおもひみる

禅寺の油土塀に秋闌けて

石庭の謂れ露けき日本語に

碧眼も露の十五の石見据え

方形に秋の日容るる石ノ庭

山茶花のうち崩るるは自刃に似て

ズバリ散る白さざんかでありにけり

さざんかの会心の白龍安寺
つと寄りて轉法輪寺道をしへ
秋蝶仁和寺のあれあれとほる仁王門
色鳥の出入りゆかし御室御所
諸鳥のこゑも染るやもみぢ御所
回廊に回廊を継ぎ萩の風
仁和寺の御室で降りぬ秋裕
秋蝶沿ふ仁和寺の塀長く長く
寶物に加え色鳥蔵す寺
さるすべりもみぢ見ながら渡り廊
大覚寺大覚寺
木斛に秋風の立つ大覚寺
大覚寺置廊下の秋のこゑ
化野化野念仏寺の露の佛の背のまろみ
石白く粗く化野露佛
化野の犬蓼の辺の欠け佛
化野の露を零せる多間塀
祇王寺祇王寺はその紫苑の右を行け
祇王寺の日暮紅葉の佛間にゐ
祇女尊女祇王尊女と紅葉観る
紅葉冷え佛御前のおん膝も
祇王寺のちよう寵ちようと音してちるもみぢ
滝口寺
横笛をおもひ染めたる色もみぢ
化野嵯峨野の人肌ほどの秋日差
嵯峨竹の春にしてなほつづく徑
朝顔の種も採らずに嵯峨野道
露けさの丹波黒豆「どうどやす」
化野の柿もとの下ゆき日暮道
落柿舎落柿舎の虫喰いもみぢ葉とす
落柿舎の庭木のそれもこれも柿
紅葉狩落柿舎辺りで日が暮れて

好事家常寂光寺の嵯峨野もみぢといふを見に

兵火八度かうむる寺にして紅葉天竜寺

もみづれる楓のいろは兵火のいろ

ほうほうと馬遠の作画秋翳り

枯山水巖顛頂に露を置き

いわし雲天龍寺船穹駈けて

拝観の最後の一人鴟を聞く

枯山水風化すすむる鴟のこゑ

ためらはず鴟は一刀両断に

「随處洛北に主と作れば」と鴟の申すなり

鴟聞きて雨の一乗下り松

洛北の雨は大粒柿の実に

冬菜沿ひずんずん下りて一乗寺

もみづれる寺に預かる幽霊図曼珠院

雨の日の障子明りに幽霊図

一葉よりもみぢ始まる曼珠院

亀躰る白砂と御坊指さしぬ

清閑を楽しみながら柿熟るる

丈山の髯詩仙堂を倣ひて錦鯉

丈山の清貧ゆかし十賊の辺

葉末よりもみぢ始る詩仙堂

雨の柿人間くさくもみづれり

沢蟹も雨にもみづる凹凸おうつか窟銀閣寺

色鳥のこゑを引出す梅擬

つつつと蕪村棕栢図にしぐれ馳せ

露の他省き尽くして銀沙灘

叭叭蕪村筆鳥を四方に翔ばせ露襖

哲学の道沿ひ鴨も散歩する

法然院雨に紛るる小鳥永観堂ごゑ

心鏡に写し参らむ照もみぢ

永観堂早紅葉さもみじ雨に色づけり

長き夜の灯を引き込みて先斗町

タクシー恵比寿神社で乗りつけ二十日えべっさん

旅人もゑびす顔して宵ゑびす

細路地の四通八達ゑびす講

お薬師東寺の広庭借りて弘法市

九度山の柿も売らるる弘法市

弘法さんの縁日みたらし団子焼く

煤けても不動明王火恋し

朗々東福寺とわたる紅葉の回廊ぞ

等伯智積院の松剛直に秋草図

秋深三十三間堂む観音一体修復中

来来世世見ゆるが如く堂障子

湛慶養源院の作とうんぬん露御坊

宗達の竹描の象身に沁みぬ

若冲忌鯉に遊ばせ貰ひをり

秋霖も京の干菓子もこまごまと

左京区の雨のコスモス高う咲く

鴨を見て京の五条の橋の上

落葉一枚頭に載せてちちんぷい

ふくらんで風除く鶉の不格好

いっぽんの山毛櫨の実二萬猿漁る

人は好きずき楸邨の柿子規の柿

楸邨の柿攻む顔がありありと

银杏黄葉落つときスイッチバックして

会心の紅葉むらぎも熱くせり

ざっと見ていちいちは見ぬ柿落葉

山茶花も人もいずればガタツと来

おいそれと返事も出来ず帰り花

わだかまりとある日解けて返り花

皆散るは文無しに似て大いてふ
いてふ散る輪舞に吾等瞬きづめ
強いられて大銀杏葉を落としそむ
藤沢市長久保植物園女郎蜘蛛あはてふためく様見んと
秋の日にカキノ木ダマシといふ樹木
木も痩せて二、三箇しけたくわりんの実
厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来
大船植物園菊花展展示日に間に合ふ菊の咲かせ方
菊の名も誇らか國華晴舞台
管物の盃咲きの濃むらさき
七本立厚物*顔とは正面のこと菊の二ここが顔
盆栽菊盆裁菊菊に石抱すべかせる術に道理あり
菊作りひとりたのしむ胸の内
後列の一際誉れ高き菊
嵯峨菊のかんざし挿して太夫咲きたゆう
伊勢菊の蕾弾けて禿かむろ咲き
七本立だるま控えぬ葭篋張り
どんぐりも首をすくめる寒さかな
木の葉髪そろそろ気になる前立腺
叙勲記事相も変はらず文化の日
首筋の辺りすうすう花八つ手
仏壇の鉦の色もて石路が咲く
「ただいま」は隣のぼうず冬隣
どんぐりの帽子がとれて仕舞ひけり
とっかかり要得ぬ電話文化の日
悪さする虫に先んじくわりん採
くわりん酒の焼酎二升程と踏む
大きくわりんぐるり廻して斑むらなき黄
包丁の齒立たぬくわりん閉口す
たたみ懐旧二句いわし焙る祖父の手見え冬へ

お使ひはさらし鯨よ爺ちゃん子
天気図の裏日本に雪だるま
冬籠動かざること鰐のごと
職引きて冬籠る図は鰐のうたた寝
立冬に要らぬ雨など降り出して
立冬の床起ち羽織るもの探す
立冬の雨止んでまた降りさうな
立冬の雨にユスリ蚊てんてこ舞
ユスリ蚊に伴奏添えてやらまほし
立冬の我がものとなる新刊書
目につくもの皆がさついで冬は来ぬ
寒くなりけふも饅餡の昼餉かな
蒼解く山茶花これは明明しあさつて後日
さざんかの落胆甚だかりしかな
山茶花の花立て直す暇無く
いっこうに何も起らぬ石落の日々
木の葉髪搔いて訴ふ忘れ物
龍淵に潜む好機を逸しけり
飽食の日々を共にす冬蠅と
雲脂飛ばす遊すさびごとして冬机
匂づくりも柿も分別顔をして
酒注げば朗々と鳴る菊脛
シベリアよりどんと吹き込む寒気団
天気図に明日の横這い寒気団
木の葉髪妻居てけふも本を読む
はやり風邪お鉢が廻り来て臥せぬ
着膨れ聞くこむら返りの直し方
一刹那初冬の鳶の影浴びぬ
落葉搔き朝から母の甲斐甲斐し
早々とポインセチアの囲み記事

咲き出せる石路に阿弥陀の頬ゆるめ
願はくば生きのまま召せと新酒着く
蠮螋の斧振りかぶり豪の者
腹見せて蠮螋ひっくり返るとは
其の斧に齒こぼれなかり枯蠮螋
素浪人風の蠮螋振り返る
蠮螋の登攀そこに壁があり
石路蓄む虻の翅音にあやされて
蜘蛛の囿にまんまと懸かる粗忽者
蜘蛛の囿が顔に迷惑千万な
同意なく此処に蜘蛛の巣張るべからず
蜘蛛の囿の顔に懸かるをエイヤツと
蜘蛛の囿の糸端探る目を皿に
獲物へと押っ取り刀の女郎蜘蛛
じたばたをぐるぐる捲きに女郎蜘蛛
腰据えて料理に懸かる女郎蜘蛛
山の日のもう一押しに木守柿
木守の余生といふは透けること
木の葉ひゅうと飛ばして山の風走むる
葉を落とし櫂そびゆること想ふ
観察小屋窓を覗けば鴨ばかり
くにやくにやと嘴広鴨の影曳きて
青鷺の八頭身を水鏡
青鷺の探り歩きの一歩づゝ
セーターの試着好みの木の葉いろ
毛衣の試着鏡よ鏡よと
ひろびろと酢牡蠣味はふ舌があり
旬も旬の酢牡蠣に若くはなし
柚子絞り酢牡蠣ほたほた旬のもの
菊脛のこる余生をどう使ふ

云はるるまゝ膝を崩して菊膾
長芋の短冊切りにひとり酌む
昼月の辺りで穂絮ついと消え
なあるほどこれが冬芽の付き方か
西の市櫛落葉がすつ飛び来
お酉さま神武景氣の世は遠く
おかめ等が夕日呼び込む西の市
手締めしてそれぞれ熊手又売れた
熊手持つ空似の人や酉の市
熊手売使い込んだる法被着て
灯がついてよりの賑はひ西の市
くらがりに襟を立てゆく西の市
お酉さま人出ぬうちの車椅子
起つ風に身震ひ一つ酉の市
電球も黄金光りに酉の市
角店で酒ひっかけて酉の市
文化の日形状記憶シャツ干せり
こめかみの辺りしやきつと冬立てり
経済てふからくり空回りして冬へ
ブルゾンの浅きポケット冬が来る
鮮紅のサーモン切身聖夜くる
フルーツパーラーポインセチアに隣る席
葉牡丹小ぶりなにぶん景氣振はずよ
妙案の浮かべるとく柚子湯の柚
鼻の真に受けし貌そこにあり
ニュアンスを変へて小藪の笹子鳴く
託ことづかる注連・松・牛蒡忘れまじ
時節柄小ぶりな松を飾りけり
年の瀬の煤ばむ顔を剃られをり
その時はその時と年送り来ぬ

柗の徒ならぬ花の数
着膨れのもたもた脱いで診察室
身勝手を通して貰ふ来る年も
試し刷り龍の賀状をおしやかにす
天井の海老のいい色年詰る
「その内」はもう目の前に十二月
かさつける五體にじんわり冬至の湯
柚子湯して柚子より軽く浮ける身の
新橋の奥の細道年忘れ
実家から千両貰ふを習ひとす
千両もて玄關飾り立てにけり
圧力鍋奮闘続く小晦日
数え日の本にも倦めば何とせう
買ひ置きの焼栗つまみ冬籠
大年の空見渡して引っ込みぬ
おでん種曰の大根をたばさみぬ
煙草屋の婆ちやん健在寒いねえ
糞る犬のすまなさうなる貌に冬日
冬服の右ポケットの底の塵
師走妻剥きかけみかん置いて起つ
水栽培針の根降ろすヒヤシンス
煮て焼いて正月料理お忙し
年の湯にしづしづと臍沈めけり
第九歌ふ誰も明眸瞠きて
初詣空がずんずん進みけり
ぴんぴんに空張りにけり枯柏
堂凍みに毘沙門天のひんむく眼
新刊書二三手にして煤籠
裸木の櫂の如菩薩仏菩薩
野暮ったき枇杷の咲き出す頃もよき

鯨鯨の毀れし貌が競^せられけり
冬夕焼会社勤めも大詰めに
小春日に犀の短軀を横たへぬ
出す出さぬ一悶着あり暮の金^{かね}
水仙花泉下にあまた眠るもの
おもちゃ屋のお猿ブンチャカクリスマス
おもちゃ屋の聖樹ちやかぴか景気付け
目につきし佳句反芻して数え日
歳末商戦泥つき長葱もってゆけ
職引きし年も詰りてやれ一年
冬ものの洗濯鼻唄バズデンボ―
ザトペック逝けると冬のチエコ通信
鉄の肺二十世紀を駈け抜けけり
人間機関車全力疾走終ゆ霜旦
ザトペック冬天を馳す蹻音す
冬の蠅発着ふとんの飛行場
青空へ飛び去る冬の蠅の音
めちやくちやな翅音愉しむ冬の蠅
おつとりと大柄にして冬の蠅
冬の蠅頭がだんだん澄んで来ぬ
冬の蠅球^{たま}の躰をぶん廻し
太陽も軌道を外れん大嚏
蠅螂の背筋をぴんと張るときあり
風邪神の有無を云はさず擦り寄れる
「へくしょん」の大盤振る舞ひ致しけり
大舟に乗った気にして風邪の身は
風邪ごゑのうだうだ云うて茶を所望
風邪神に煙草の味を抜かれけり
鼻風邪の昼餉を問へる鼻濁音
鼻風邪のやる気なき身に鞭入るる

鼻風邪を温存するにはあらねども
鼻風邪に愚図る頭を整理せむ
鼻風邪を直す呪文のもしあらば
風邪神のもう四五日と居直りて
鼻風邪の鼻がむずむず直るらし
風邪神のけふ打晴れて御出立
平熱と体温計を振る襦袢懐古
木の葉相搏つ音やがて無くならむ
心臓の薬の後に風邪薬
そそり立つ一冬木見て職引く身
ポーナスのもう出ぬ冬を迎えけり
木枯の夜間働く温水器
とある日の氏子総出の落葉搔
初老とは櫟黄葉を潜るに似て
着膨るゝ人を見上ぐる鯉の目見まみ
隙間風どのみち立て付け直す家
裘匂ふ女と相席す
枯るゝ夜を飛行機野郎の本を読むサンデーマガジンペリ
落葉には熊手ステーキにはフオーク
鳩止めて落葉終る木終らぬ木
早々と葉落とし清々しき櫟
狷介といふ性鴉に染みつきて
味はうて閒石翁の海鼠の句
読みさせば落葉済ませし木々が見え
ポプコーン抛り込むとき小春雲
冬麗の砂零しては初老の手
松蔭の教へしところ冬紅葉
赤松に冬日押し照る豪徳寺
ボロ市や衣の厚きトンカツ屋
ボロ市や枝に引っかけ策を売る

ボロ市の湯呑み茶碗を爪弾き
ベトナムの竹の鳥籠ボロ市に
ボロ市のビルマヒスイと言ふけれど
ボロ市の包みと包みぶつかれる
ボロ市のやかん頭の骨董屋
ボロ市に選ぶ和服の裾つまみ
ボロ市の戻り足腰くったくた
頭から見下ろされぬる裘
裘女だてらに腕組みす
裸木と紅葉半々山手線
冬日向渡り歩いて病院へ
外来の患者持ち込む咳いろいろ
採血の針見ぬやうに木の葉髪
枯るる身に探りを入るる聴診器
着膨れて財布まさぐる一患者
茜空凍みて東京横浜間
冬木の芽篤くと見て其処離れけり
蹲る鳩を裸木見下ろせり
降り出して梶子の実に韻く雨
くわりん皆もがれし後も黄葉して
選り惑ふ箸にぶつかるおでん種
投函の意を削がれたるこの寒気
一冬木仰ぐ心もささくれて
落葉駆く慌ただしさに立ち止まる
柵の潰えし花の埃じみ
埃じむ眼鏡磨きて冬籠
数え日の眠気もたらす車窓の日
幾たびも使へる聖樹飾り立て
毛衣の品定めする旅車中
冬籠薬袋を身ほとりに

葉を落とし往時のままの瘤櫂
間引かれて残る紅葉をうち仰ぐ
性根据え大榊冬を迎へけり
デザートのみかんに灯影殺到す
はつらつと通りすがりの花八つ手
大银杏黄葉間引かれ素寒貧
てのひらに移して冬の蟻這はず
丸腰の裸木なれば寄り易し
瘤隆と立寄り易き一冬木
生返事たしなめらるゝ木の葉髪
目つむれば宙に浮く吾日向ぼこ
行き来して句作り算段枯木中
冬菊を前に病ひに勝てるひと
冬至湯に絆創膏も浸りゐて
山茶花をいたぶる霜の手をゆるめず
通勤の鼻を尖らす寒さかな
懐旧
龍の玉なんぞありそな館とも
八つ手咲き板塀が反る日向路
年金にて妻のやりくり冬珊瑚
修理費てふ伏兵に遭ふ年の暮
臨時出費あれこれ出でくる年の暮
年頭の旅の誘ひの声掛かる
恒例の初旅年金取り崩し
年頭の旅はいつもの顔ぶれで
寛容と厳格同居冬櫂
それぞれの星に名のあり年忘れ